

マルコ 10 章 13-16 節

「子どものように」

子ども祝福式とは、神様の前で、子どもたちを特別に覚えて、神様に祝福していただく礼拝です。なぜ教会で行うのでしょうか？

それは、今日の箇所に書かれてある通り、何よりイエスさまが子どもたちを招いて祝福なさったからです。イエスさまの弟子たちは、忙しいイエス様を思って、「邪魔だから帰れ！」と子どもたちを追い返そうとしました。ですが、イエスさまはそれをご覧になって、弟子たちを憤られます。それ程までにイエスさまは、「子どもたちを祝福する」ことを心からお喜びになりました。「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」すなわちイエスさまは、子どもたちの「神の国を受け入れる」姿を目にして、それをとってもお喜びになったということです。

「子どものように神の国を受け入れる」、とはどういうことでしょうか。「神の国」とは、「この世界に及び神さまの目に見えない力強いご支配」のことを言います。「神さまは本当に生きておられ、私たちの人生の本当の主人であられ、私たちのことを確かに本当の救いへと導いて下さる御方です」と信じるのが、受け入れるということです。でもそれを、「子どものように」受け入れることが、大事だと言っています。今日の直前の記事、「離縁について教える」でイエスさまは、「離婚が認められるケースがあるというのは、人々の心があまりに頑なので、仕方なく掟ができた」と答えました。このイエスさまの話聞いた人たちは、悔い改めるところか、さらに「心を頑なに」してしまったのです。「心の頑なさ」は、私たち自身にも、よくあることです。そしてこれは、「大人たちの心の頑なさ」です。「大人みたいに心を頑なにしないで、素直で柔らかい心で、神の国を受け入れる」ことが大事だと伝えているのです。もちろん、子どもも「頑なな所」はあります。でも子どもは、とても弱い存在です。だから「自分よりも強くて大きくて、頼りにできる誰か」が教えてくれることを、素直に聞いて受け入れ、その言葉に信頼して生きる姿が、子どもにはあるのです。その「尊い姿」を、私たちも覚えなくてはならない、というのです。ところが実際は、「子どもの尊い姿」を台無しにしてしまうことが、大いにあるということです。私たち大人や親は、子どもたちに、神さまが与えてくださった「素直に神さまにお頼りしていく姿」を、大切に守り育てる責任があります。そのために、私たちが率先してそういう生き方をしていけないで、どうしてその責任が果たせるのでしょうか？

だからまずは、私たち大人や親が、神様の御言葉に素直に聞き従い、心から信頼する生き方を、子どもたちの前で、子どもたちと一緒に、分かち合っていくことだと思います。その時、子どもたちは、ますます「神様への素直で純真な信仰」が励まされて行きます。「心から愛し尊敬しているお父さんやお母さんが、いつも、どんなことがあっても、神さまと御言葉に、へりくだって、素直に聞き従っている」姿を見ることほど、子どもたちにとって励まされるものはないと思います。そうした親や大人の姿は、子どもたちの将来を決定づける「何よりの模範」、「何よりの尊い目当て」になって行くのでしょうか。どうかお互いの姿が、キリストを証しする姿となりますように。